
君の知らない物語

ahiru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の知らない物語

【Nコード】

N9271V

【作者名】

ahiru

【あらすじ】

super cellの「君の知らない物語」を小説化してみました。

夏の空に煌く星。

見つかたって届きはしないもの…。

私にとって君は、星のような存在だった。

すれ違う、振り返る。

通り過ぎる背中を見つめて、ため息をつく。

そんな毎日が、楽しくって

でも、それ以上に辛くって…

ずっとずっと、こんな風に

君との毎日が過ぎて行くんだと思ってた。

それは月のない日だった。

夏の空。午後6時ちょっと前。既に暗くなり始めていた空を、私は窓辺に肘をついて眺めていた。

『学校なんて暇つぶし』なんて、入学当初はやる気のない事を思っていたのに、何でこんなに遅くまで学校にいるのか…

そんな事をぼんやり考えて苦笑する。

「天文部に入ったからね…。」

そう呟いてため息をつく。

同じ教室、今は天文部の部室と化した教室で楽しげに笑ってる君を少しだけ見て、また空を眺める。

何で天文部に入ったのか…。

そんなの考えるまでもない。

…君が、いたから。

「なーに黄昏れてるの？」

不意に君の声が近くで聞こえた。

油断していた私は思わず、どきっとしてしまふ。

振り返るとすぐ後ろに君がいる。

その状況がなんだかこそばゆくてつい下を向いてしまふ。

「…え、1番星ないかなあゝって…」

下を向いたまま答える。

緊張して声が震えそうだったのを必死で堪えていたから、どうしても小さな声になってしまった。

「なんだ黄昏れてた訳じゃないんだ。…で、1番星見つかった？」

言いながら笑う君が眩しくて、視線をまた空に移す。

「うつん…まだ…」

そうやって見上げた空は一瞬前より暗くなっていて、綺麗に青と紫に染まっていた。

「どれ、俺も探すわ。」

そう身を乗り出した君は、ひょっとしたら私の鼓動の音が聞こえてしまふんじゃないかってくらい近くって。どうしようもなく緊張して、でも嬉しくて…。

どんどん速くなる鼓動に胸が苦しくなった。

触れそうで触れない。

そんなもどかしい距離が私と君との距離。

…そう、思ってた。

「あ、ほらあそこ！」

言いながら指をさす嬉しそうな君。

見た先には1番星。

「あ、ほんとだ…」

「俺のが先に見つけちゃったね」

おどけるように言って、君はまた私から離れる。

「今日は、ね。たまたまでしょ！」

つい憎まれ口を叩いてしまふ。

本当はもう少し話したいだけなのに、いい言葉が見つからない。

「言ったな！じゃあ夏の大三角形、探してみ？」

「え、1番星出たばつかなのに見えないに決まってるじゃん！」
君の言葉に少しむきになったように答える。

それを受け流して君はまた空を見る。

「それもそうだな…。大体、この辺って明る過ぎてなかなか星見えないし…。」

呟くように言って、自席で携帯を取り出し何か調べだした君を不思議に思っただけ。

その瞬間、いつも通り下校のチャイムが鳴る。

皆が帰る準備をし始めた――その時だった。

君は突然、立ち上がり言った。

「今夜、星を見に行こう！」

「たまにはいい事いうんだね」

なんて皆して言っただけ。

すっかり日の落ちた放課後の明かりもない道を馬鹿みたいにはしやぎながら歩いていく。

偶然が重なっていた日だった。

皆、バイトも用事もなくて、空は快晴で。

月がない、星のよく見える日だった。

君に目をやると楽しそうに笑いながら歩く姿が見えて、ちょっと胸が締め付けられる。

…君の隣にいるのが、私じゃないから。

前から知ってた。彼女が君の事、好きなんじゃないかって事くらいだから君が楽しそうに笑う程、私は不安でいっぱいになる。

それを悟られないように馬鹿みたいにはしゃいでた。

抱え込んだ孤独や不安に押しつぶされないように。

着いた先は学校の近くの土手。

明かりがないから、懐中電灯がないと本当に何も見えない真っ暗な世界。

そこから見上げた夜空は、星が降るようで。

「ほら、これなら探せるだろう？」

そう私に笑いかけてくれた君に『ありがとう』って言いたくて。だけでもやっぱり、何かが邪魔して言えなくて…。

「こんなに多くちゃ逆に無理ーっ！」

出てきた言葉はこんなだった。

それでも君は笑ってくれて、一緒に探してくれると言う。

…いつからだろう。

こんな風に君の事を好きになったのは…

いつもどこかで君の事追い掛ける私がいた。

ねえ、今 言ったら君は何て答えてくれる？

もし、いつか話す時がきても

その時はどうか驚かないで聞いてよ私のこの想いを。

「あ、見つけた。」

しばらくして君が声をあげる。

「え、どこ…？」

目を懲らして探すけど、なかなか見つからない。

そんな私に気付いたのか、空に腕を伸ばす君。

「あれがデネブ、アルタイル、ベガ。」

君が指差す夏の大三角。

覚えて空を見る。

ずっと眺めてやっと見つけたのは織り姫様。

だけど、どんなに探しても彦星様は見つからない。

…これじゃまるで…。

『ひとりぼっち』

ふと耳を澄ましてみると聞こえてくる君の楽しげな声。

私が眺める先には嬉しそうに笑う君の横顔。

その笑顔の先にいる彼女を私は羨ましそうに見るだけで、何も言えなくて…。

本当はずっと、叶わない恋だっという事は分かっていた。

ずっと目で君を追いかけていたから、その優しげな眼差しが私に向いていない事も、君が他の誰かを大切にしている事も、そしてその想いが私の君に対するそれと同じだっという事さえも…どこかで分かっていた。

今も見上げれば遠く輝くあの星のように、見つかったって届きはしない。

溢れる涙を零さないように星を見上げながら

『だめだよ、泣かないで』

そう、いい聞かせた。

そうやって強がってる私は本当は君に気持ちを伝えるのが怖くって、ただただ『恋』なんてものに興味が無いようなフリをした。

…だけど。出会ってから今と言う時まで、君という人を知っていく程に好きになってしまって。

届かない気持ち、もどかしくて胸を刺す痛みは増してゆくばかりで…。

いつの間にか知らないフリなんてできなくなってしまうていた。

ああ、そうか。

『好きになる』ってこういう事なんだね…

深く、ため息を吐いて目を閉じる。

『どうしたい?...言うてごらん。』

心の、声がする。

ゆっくりと目を開きながら心の中の声に答える。

「君の隣がいい...。」

そうして開いた目の先にいる『君』の姿は彼女の隣。

人目をはばかるようにちよつと躊躇しながら、幸せそうにキスをする二人の影。

どうしようもないくらいに、目の前の現実には私にこう告げていた。
『真実は残酷だ。』

窓を開けて、あの日と同じような星空を見上げる。

蒸し暑い空気と共に吹き抜けていったのはあの日の記憶...

ふと、手元にあつた手紙に目を落とす。そこには結婚式の案内の文字。

「結局、ゴールインしたんだなあ...あの二人。」

その手紙の裏には大好きだった君の名前。

ちよつと苦しくなる胸を押さえて目を閉じた。

大きく息を吐いて再び手紙に目を向ける。

出席に丸をして、また星空を見上げた。

言わなかった。

...言えなかった。

あの日の君の姿を見てからも、想いは変わらなかったけれど。

もう二度と戻れない、あの夏の日...

今、私が見上げてる星空に煌く星、あの時とちつとも変わっていないね。

どんなに年月が経ったとしても、星空を見上げれば今でも思い出せるよ。

笑った顔も怒った顔も大好きでした。

結局、伝えも届きもしなかったのにね。

…おかしいよね？

こうなるって分かってたのに、未だにこんなに苦しいなんて…

誰も知らない物語。君の知らない私だけの秘密。

この夜を越えて

遠い思い出の君がまた指を刺す、今ではもうすぐに見つけられるようになった夏の大三角形。

君の真似をするように星をなぞる。

「あれがデネブ、アルタイル、ベガ…。」

無邪気な声で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9271v/>

君の知らない物語

2011年9月7日20時50分発行